

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	奉悼明治天皇歌並短歌：文苑
Author(s)	陶山，喜六
Citation	龍南會雜誌， 1 4 7： 5 4 - 5 5
Issue date	1912-11-18
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6397
Right	

So wandern bei den erhabenen Klängen gyltischer Melodien in den elysäischen Federn annuttige Schatten dahin — freudlos und leidlos.

Pargenjeff.

(大正元年十月二十日夜)

奉悼明治天皇歌並短歌

陶山 喜 六

久堅の、天が下には、國はしも、多にあれども、空爾見津、大和の國は、千早疾、神の御代より、傳はりて、
 かはらぬ國よ、其國の、神のみするに、あれまして、大御寶を、安らげく、知食しつゝ、日の本の、本つ光
 を、いちじるく、八洲の外の、海かけて、照しましたる、高光る、日の大御神、安見知、我大君の、草管見、
 やまひましゝを、四の民、うれへまつりて、鳥羽玉の、夜はすがらに幣帛を、神に平向けて、茜さす、晝は
 ひねもす、玉串を、神に捧げて、かくさはぬ、赤き心に敷妙の、家をも身をも、白波の、かへりみなくて、
 墨繩の、たいひとすぢに、神等に、祈りまつれど、靈幸、神のみめしか、掛巻も、畏かれども、生母の、其
 甲斐もなく、神隨、神去りましたつ、天の原、岩戸を開き、神あがり、あがりいまして、いかにせむ、如何に
 せましと、日刺方の、天をば仰ぎ、荒金の、地に平伏し、鹿自物、這廻らひ、射部人の、伏轉転て、岩根も、
 裂げよと號叫び、綿津見も、あせよとばかり、働栗きつゝ、黒自も知らに、くれまごふ、現の闇の、天が下、
 ぬれ伏す四方の、み民草、また差し出でし、み光の、影をかしこみ、宣りませる、御詔算み、ひるまなき、
 袂をしぼり、つくよなき、かなしびしぬび、群肝の、心の限り、うつしみの、からだのきはみ、天皇に、極

め盡して、秋津洲、國の光を、天つ空、日の照るきはみ、かどやかし、天津日繼は、天地の、榮のきはみ、
安らげく、幸くいませと、朝宵に、つかへまつらむ、吳竹の、伏見の山に、神ながら、鎮りませる、天皇も、
さかゆく御代の、行末を、みそなはしつゝ、護りますすらむ。

反歌

みひかりのかぎりなきよに生れあひててる日のくれし日にもあひけり

明治天皇奉悼歌三首

陶山喜六

天つ日のかくれいまして天が下青人草の色なかりけり

諒闇の秋といふをよめる

千萬の民の涙やそひつらむいとゞしぐるゝこの年の秋

御大葬の日よめる

いとどなほほさぬ袂をしぼるかなかへりきまさぬけふの御幸に

乃木將軍追悼三首

陶山喜六

のこしたく君がまことの言の葉はいくよの春かしげり行くらむ
天地もつらぬく君がまごゝろはやしきの外にかどやきにけり
大君のみあとしたひてゆく君の赤き心を心ともがな